

大気化学研究会ニュースレター

- No.6 -

Autumn 2001

大気化学研究会からのお知らせ

第12回大気化学シンポジウムのご案内

来る2001年12月3日(月)~5日(水)の3日間、第12回大気化学シンポジウムを下記の通り開催いたします。大気化学シンポジウムでは、グローバルな対流圏および成層圏大気の化学・輸送過程について最新の研究成果を発表しあい、十分時間をかけて密度の濃い議論を行うことを目的としております。また、研究者どうしの情報交換を行い、それぞれの研究プロジェクトの相互理解を深める機会となるよう希望しております。今年度は3日間の日程で行います。第1日目に成層圏化学の集中セッションを設け、成層圏に関する研究を集中的に論議する場とする予定です(編集委員注:次ページの林田委員の記事を参照してください)。2、3日目は、昨年と同様に対流圏・成層圏の口頭発表およびポスターセッションを予定しております。一部の発表をポスターとして個別にじっくり議論を深めてもらうと共に、口頭の発表時間を長くとり十分な議論を行いたいと考えております。大気化学研究の幅広い分野から、多数ご参加くださるようお願い申し上げます。

日程: 2001年12月3日(月)午前 - 5日(水)午後

場所: ホテル日航豊橋(旧ホリデイイン豊橋) ホームページ: <http://www.holidaytower.co.jp/>
豊橋駅より送迎バスで10分(毎時2本運行) TEL: 0532-48-3131, FAX: 0532-46-6672

参加費: シンポジウムの参加登録費は無料です。

懇親会: 12月4日夜に懇親会を予定しております。(懇親会参加費有料)

宿泊: ホテル日航豊橋を1泊朝食付8000円(税別)にて利用することができます。宿泊ご希望の方は、ホテルへ直接お申し込み下さい。その際必ず「名古屋大学の大気化学シンポジウムで利用」とお申し出下さい。

発表申し込み締め切り: 2001年10月19日(金)

シンポジウムでの発表希望者は、講演題目、氏名(発表者の前に丸)所属、申込者氏名、連絡先(住所、電話、FAX、e-mail)、旅費支給の希望の有無、口頭またはポスターの希望、および成層圏集中セッションへの申し込みかどうか、懇親会の出席希望の有無、以上を書いた電子メールを連絡先電子メールアドレスへお送りください。もしくは、A4紙に記入の上で下記連絡先住所へ郵送でお送りください。

詳細は、大気化学研究会ホームページ(<http://www.stelab.nagoya-u.ac.jp/ste-www1/div1/taikiken/>)に掲載いたします。

世話人: 東京大学先端科学技術研究センター 近藤 豊

名古屋大学太陽地球環境研究所 松見 豊

連絡先: 〒442-8507 豊川市穂ノ原3-13

名古屋大学太陽地球環境研究所 第一部門内 大気化学シンポジウム係

電話: 0533-89-5192、ファックス: 0533-89-5161

E-mail: taikiken@stelab.nagoya-u.ac.jp

第6回大気化学研究会運営委員会の報告

日時: 平成13年5月30日(水)

場所: 琵琶湖グランドホテル(大気化学討論会会場)

出席者(敬称略、順不同): 秋元 肇、中澤 高潔、植松 光夫、小池 真、河村 公隆、白井 知子、北 和之、林田 佐智子、長谷部 文雄、松見 豊

1. 会員状況および会計報告

事務局より以下のように報告があった。

平成13年度会費納入者（5月28日現在）

一般会員 111名（新規22名、更新89名） 学生会員 46名（新規25名、更新21名） 計 157名

平成12年度会員

一般会員 152名 学生会員 66名 計 218名

今後、会員登録を更新していない会員に連絡する予定であることが報告された。

会計状況については、毎年の会員会費で運営費がまかなえている状況であることが報告された。

それに対し、事務局の人件費をきちんと計上するべきとの議論が出た。

2. 大気化学研究会の英語名の検討

以下の候補について次回の運営委員会まで検討し、適当ということであれば次回の会員総会に諮ることになった。

The Japan Society of Atmospheric Chemistry (JSAC)

3. 次回（第8回）大気化学討論会の世話人

北海道大学低温研究所 河村公隆先生にお願いすることとした。

4. その他

1) 林田委員より成層圏の研究を中心とした研究集会を大気化学研究会でバックアップしてほしい旨の問題提起があり、これについて議論した。次回の大気化学シンポジウムに成層圏に関するセッションを設ける、手始めに少人数でも研究集会を開催するなどの意見があった。（編集委員註：以下の林田委員の記事を参照してください）

2) 近藤委員より地球惑星科学合同学会に参加する形で討論会あるいはシンポジウムを開催することを検討してほしい旨の問題提起があった。種々のメリット、デメリットが議論されて、引き続き検討することとした。

（議事録作成：大気化学研究会 事務局 松見 豊）

会員からのお知らせ・報告

大気化学シンポジウムに「成層圏セッション」を提案します。

奈良女子大学 林田佐智子

大気化学シンポジウムは、大気化学研究者の交流の場として毎年活発な研究発表で盛会をきわめています。このシンポジウムは名古屋大学太陽地球環境研究所の主催するもので、大気化学研究会の発足以前は中層大気研究の発表が中心でしたが、国際的な研究方向の転換を背景に、現在では対流圏化学の研究発表が多くなっています。大気化学研究会では、「対流圏」「成層圏」と研究領域を分けることなく、相互の積極的な交流を図ることを主旨としていますので、これまでの大気化学シンポジウムでは、成層圏と対流圏のセッションを分けずにむしろ融合してゆく方向でプログラムが組まれていたように思います。研究分野によっては、研究対象とする高度領域で分かれることが無意味な場合もあります。しかしながら、やはり成層圏の大気光化学、オゾン層破壊を中心としたトピックなど、成層圏に特有の問題もあり、成層圏に特化した研究会も必要であると考えます。特に中層大気力学と大気化学の研究者の交流は重要であると思います。

翻って現状をみると、気象学会は残念ながら研究集会としての役割を十分に果たしていません。（この点については先だって気象学会誌「天気」で意見を述べた通りです。）また、様々なプロジェクトが走っているが、研究者の大多数が参加する大型のものはありませんし、仮にあったとしても、「研究費」がらみの集会では、研究費を受けている人と受けていない人の格差が生じてしまい、本当の意味で中立・公正な研究者の交流の場としては機能しにくいと思います。

昨年の大気化学シンポジウムの懇親会の席上でも、同様の意見を何人かの方から伺いました。そこで先日開かれた運営委員会で、成層圏に特化した研究会開催を提案したところ、純粋に科学的な興味から研究会を開きたいのであれば支援するとの意見をいただきました。そして、次回の大気化学シンポジウムの第一日に成層圏のみのセッションを設けていただくことになりました。このような試みが実を結ぶものかどうかわかりませんが、せっかくの機会ですので、できるだけ多くの方々の発表をお願いしたいと思います。特に中層大気力学に関する研究発表も積極的にお願いします。これが成層圏研究に関わる方々の交流の一つの契機となりましたら幸いです。

第7回大気化学討論会の開催報告

大阪府立大学大学院工学研究科 坂東 博

平成13年5月30日(水)から6月1日(金)の3日間にわたって、滋賀県大津市の琵琶湖グランドホテルにて第7回大気化学討論会が開かれました。参加者数は97名(前回の鳥羽ではちょうど100名だったそうです)その内女性参加者は16名でした。男女の構成を問題にすること自体時代錯誤だろうとは思いますが、年々女性の参加者の比率が上がって来ていることは、この分野が開かれた研究分野として(本当?)伸びていることを示しており、喜ばしいことなのだろうと、どなたかが言っておられたのを耳にしました。今回、琵琶湖の辺での開催を最終的に決めるにあたり、いろいろと紆余曲折がありました。1)出来れば温泉地にてという代々の慣例、2)それでいて全国各地からのアクセスが良く、尚且つ3)学生の皆さんも参加し易い参加・宿泊料金体系で、という条件に加えて、多分4)研究会のモットーとされているであろう威厳と品性のある会にして欲しい、という大変な制約条件の中で、兵庫県の有馬、和歌山県の白浜との競争の中で、今回の会場が選ばれました。どの条件が最終的に無視されなければならなかったかは会員の皆様のご想像にお任せしますが、そのような状況にもかかわらず多数の女性参加者を迎えることができたことは、事務方を担当したものとして正直ホッとした次第です。

発表は、口頭発表が31件、ポスター発表が38件でした。前回と比べると口頭・ポスターの件数がほぼ逆転しています。前々回から始まったポスターセッションが徐々に浸透してきて件数が増えるに伴い、若い世代の研究者の発表が多くなってきているように思います。ポスターセッションの充実は確実にこの研究会の裾野が広がってきていることを物語っているのでしょうか。内容的には、エアロゾル関連の発表が多かったこと、野外観測関連の発表では流跡線解析やシミュレーション解析を含めグローバルな描像を提示して議論が進められる傾向が従来より強まってきたこと、室内実験系の研究発表が増えたこと、等が今回特に印象に残りました。

討論会のプログラムを編成する上では、口頭・ポスター枠の調整で無理をお願いすることもなくこの発表件数に収まったことから、初日午後から最終日午前中終了というスケジュールでも1件当たり20分の口頭発表枠を取ることができました。しかし、前回のようにこの件数が逆になっていたら、スケジュール調整には苦労することになっただろうと思います。それでも口頭発表では全般的に時間が足りないと感じさせるものが多かったように見受けました。討論会と銘打つ以上20分でも足りないのかもしれませんが、十分なディスカッションを目指すために、本討論会の初期の頃のように口頭発表を30分枠(発表20分+討論10分)にすることを検討してもよいのではないのでしょうか?その場合、口頭発表の件数はかなり制限せざるを得なくなります(20件程度か)。そこで、例えば1回の討論会における口頭発表枠はある特定のテーマ(または、分野)4つ程に絞り、企画物として基本的にはinvited talkとし、発表者は運営委員会で決める。年毎に取り上げられるテーマが偏ることを避けるために、2-3年程度の間のテーマを事前に決定・公表しておく。まあ、4テーマの内1つはフリーにしておき、その前年1年間のhot topicsを取り上げる、または、事務局を引き受けるグループの自由裁量に任せるといったようなバリエーションも考えられると思います。運営委員会の場、あるいは会員のインターネット討論等で議論してみても如何でしょうか?

最後になりましたが、一言付け加えておかなければならないことがあります。本討論会の最終日にある会員の方から、「今後は温泉地という縛りはもう無しにしたら如何でしょうか?これがあるために、概してアクセスに時間がかかり、宿泊数が多くなり勝ちで、参加費が高くなり、学生会員が気軽に参加できないという点を考慮すべきだ」という意見をいただきました。これまで7回に及んだどちらかというと都会を離れて温泉地で開催された本討論会が、会員間の親睦、とりわけ若手の会員がお互いを知り合う場として機能してきたという積極的な側面(?)も評価できるのではないかと思います。私見を添えて、雄琴で開催された大気化学討論会の報告を終わります。

IGAC-ITCT workshop 報告

東京大学先端科学技術研究センター 近藤 豊

IGBPのコアプロジェクトであるIGAC(International Global Atmospheric Chemistry)のプロジェクトとしてITCT(Intercontinental Transport and Chemical Transformation)が2001年の1月に正式に認められた。ITCTの目的は人為起源の大気汚染の大陸間の輸送と輸送中での化学的変質を調べることにある。ITCTの計画を更に具体化するために2001年6月7-8日にBoulderのNOAA Aeronomy Laboratoryで2回目の委員会が開かれた。日本からは委員である秋元肇、近藤豊の2名が出席した。この会議では既にあるwhite paperをより完全に近いものにするのを念頭におき、ITCTのめざすものを明確化するための議論が2日間にわたり行われた。この結果中心的な課題が以下のように設定された。

#人為起源の大気汚染の北半球中緯度での大陸（北米、ヨーロッパ、アジア）からグローバルな大気中へ輸送されるフラックスを評価する。

#グローバルな大気中へ輸送される北半球中緯度の大気汚染の最終的な行方を調べる。

#北半球中緯度での大気汚染の大陸間の輸送が地表での大気質にどのように影響するかを調べる。

#熱帯域での急速な人口増と工業化がグローバルな大気化学に与える効果を調べる。

更に詳しくは、改訂された white paper に記されている。これと議事録は近いうちに web site に載せる予定であるが、直ぐに必要な方は近藤まで連絡されたい。国際 APARE(East Asian/North Pacific Regional Experiments)グループとしても ITCT に対応するプロジェクトを設定しようとしているところであり、今後国内の研究体制を整備し研究グループを形成していく必要がある。

第10回 IGAC-APARE workshop 報告

東京大学先端科学技術研究センター 近藤 豊

APARE (East Asian/North Pacific Regional Experiments)も IGAC のプロジェクトの1つであり、正式に活動が開始されてから10年が経過した。委員を出している国・地域は、日本、中国、香港、台湾、韓国、アメリカ、シンガポール、インドネシアである。今後 APARE は ITCT と密接な協力のもとに進めることになった。今年度から、植松氏に引き継いで、近藤が APARE の convener を2年間勤めることになった。

APARE では毎年1回、委員の連絡と研究発表を兼ねた workshop を開催しているが、今回初めて中国で開催されたという点で記念すべき workshop であった。中国気象研究所の Jie Tang 博士がホストになり青海(チンハイ)省の省都である西寧(シーニン)で8月8日から12日にかけて開催された。西寧は2200メートルの高地にあり、この時期が最も過ごし易いとのことであった。日本からは近藤、畠山(APARE 委員)、植松(APARE 前委員)、梶井らが参加した。この会議では TRACE-P、Ace-Asia に関する各国での研究活動が発表された。また今回、近藤はこの workshop で今後長期的にアジアを中心的なフィールドとして取り組むべき研究計画の設立を呼びかけた。これまでどちらかといえば APARE は、NASA や NSF の設定した計画に対し、地上観測という形でこれを補完するものとしての活動に留まってきた。しかし今後は、アジアの研究者からの積極的な計画立案を基にして、長期的な視野で国際的な大気環境研究活動を行おうではないかと考える委員が多く、新計画に対する期待は大きい。計画の骨子は1)アジア大陸周辺からアジアに流入する大気の化学的性質や輸送経路を明らかにする。2)大陸上での大気化学反応過程を定量化する。3)大陸からその周辺及び太平洋へ流出する間の反応、輸送過程を調べることである。また中心となる研究対象成分はオゾン、エアロソル及びそれらの前駆物質である。またこれは ITCT 計画に整合的に結び付けられるべきものであろう。

今回の workshop のハイライトは標高3800メートルにある Mt. Waliguan の China Global Atmosphere Watch Baseline Observatory(CGAWBO)の訪問である。8月12日朝8時頃西寧のホテルを観測所の車で出発し、なだらかな高原地帯をゆっくりと昇っていった。広大な草原でヤクガのどかに夏の日差しを楽しんでいる光景や、気ままな遊牧生活をしているチベット-モンゴル系の人々の生活ぶりは、チングスハンの昔を彷彿とさせる。観測所の立派な応接室に座った多くの参加者は高所での酸素不足と途中の車の揺れで最初心なしに青ざめ、ぐったりしていた(ように思えた)。昼食後、観測所の見学を行ったが、多くの質問が出て出発が大幅に遅れた。しかし、予定通り帰路、巨大な青海湖に立ち寄った。この湖の水位は年々僅かずつ下がっているとのことである。同行した科学記者からその理由と気候への影響を質問された。私の答えは青海科学新聞に載ったかもしれない。1日で車が2回パンクしたアクシデントもあって、ホテルに着いたのは夜の11時頃だった。観測所の観測は現有の測定器でしっかり行われているものの、今後の研究の発展には観測項目の充実が必要であろう。晩餐会のカラオケで美声を披露した所長の Yan 氏を始め中国研究者が観測所の国際的利用に熱心であった。また今回参加者が強く感じたのは、中国側が、中国の研究観測施設の利用を含め、国際共同研究に熱心だったことである。今回の workshop は、最後まで興奮的な雰囲気でも推移した。これが単なる良き思い出に終わらず、この熱意を生かし APARE として組織化された研究計画に発展できればと思っている。

発行： 大気化学研究会ニュースレター編集委員会（北 和之、白井知子、小池 真）

連絡先：〒442-8507 豊川市穂ノ原3-13 名古屋大学太陽地球環境研究所 第一部門気付 大気化学研究会事務局

電話：0533-89-5192 ファックス：0533-89-5161

電子メール：taikiken@stelab.nagoya-u.ac.jp

大気化学研究会ホームページ： <http://www.stelab.nagoya-u.ac.jp/ste-www1/div1/taikiken/>

